

ことばによって自己をひらく国語科の学習

—第2学年「わたしのたん生」の実践を通して—

谷 栄 次

1 はじめに

現在、子どもたちのまわりに起きている様々な問題は、「言語によるコミュニケーションの弱さ」「主体性（自ら考え判断し行動する）の弱さ」「思いやりの心の希薄さ」などに起因していると考えられる。この現状を打開するために、国語科の担う役割は大きいと言わざるを得ない。

これまでに国語科では、子どもたちの興味・関心や問題意識、必要感などに即した学習課題を設定し、その課題の解決をめざす過程の中で、認識の拡充や深化を図り、国語科として育てるべき技能や自己学習力を身につけることに取り組んできた。低学がにおける学習では、特に子どもたちの関心・興味あるところを中心に、教材を求め、国語学力をつけていくことを考えていかなければならない。なぜなら学習に対しての心の向きみたいなものがより大きく左右するからである。

子どもたち一人ひとりが生き生きと国語科を学ぶために、生活と密接につながる単元構成を考えた。国語科を生活化していく中で、聞く・話す・読む・書く活動を関連させて、それぞれの能力を高めていく。本稿では、生活の中から問題を見つけ、考えたり調べたり話し合ったりする言語活動を通して、自己を切り拓いていく国語科の学習のあり方について考察していきたい。

2 授業仮説の設定と単元構成の工夫

自分たちの生活の中での出来事について取材し、書いたり話したりして表現していくことは、低学年の到達目標であり、上位能力でもある。子どもたちが知りたい・調べたいと思うことを学習の出発とし、印象や気持ちをことばにして思いをふくらますことができれば、意欲的に表現活動に取り組むことができるだろう。そうした考えをもとに、授業仮説を次のように設定した。

身近な題材を取り上げ、自分なりの新しい発見や驚きに出会う場を設定し、表現方法を理解することができれば、子どもたちは、表現することを楽しみながら、意欲的に学習に取り組むであろう。

上述のような授業仮説を立て実践を進めていくとき、単元構成の工夫が重要になってくる。単元を構成するにあたり、次の4点を大切に考えた。

- どの活動でどんな力が身につくのかを明確にする。
- 同じテーマのもと、一人ひとりにちがった良さが表れるような話題にする。
- 調べたことが表現活動（話す・書く）に発展するような単元構成にする。
- 子どもたちの思いや願いが生きるように弾力的な学習展開を考える。

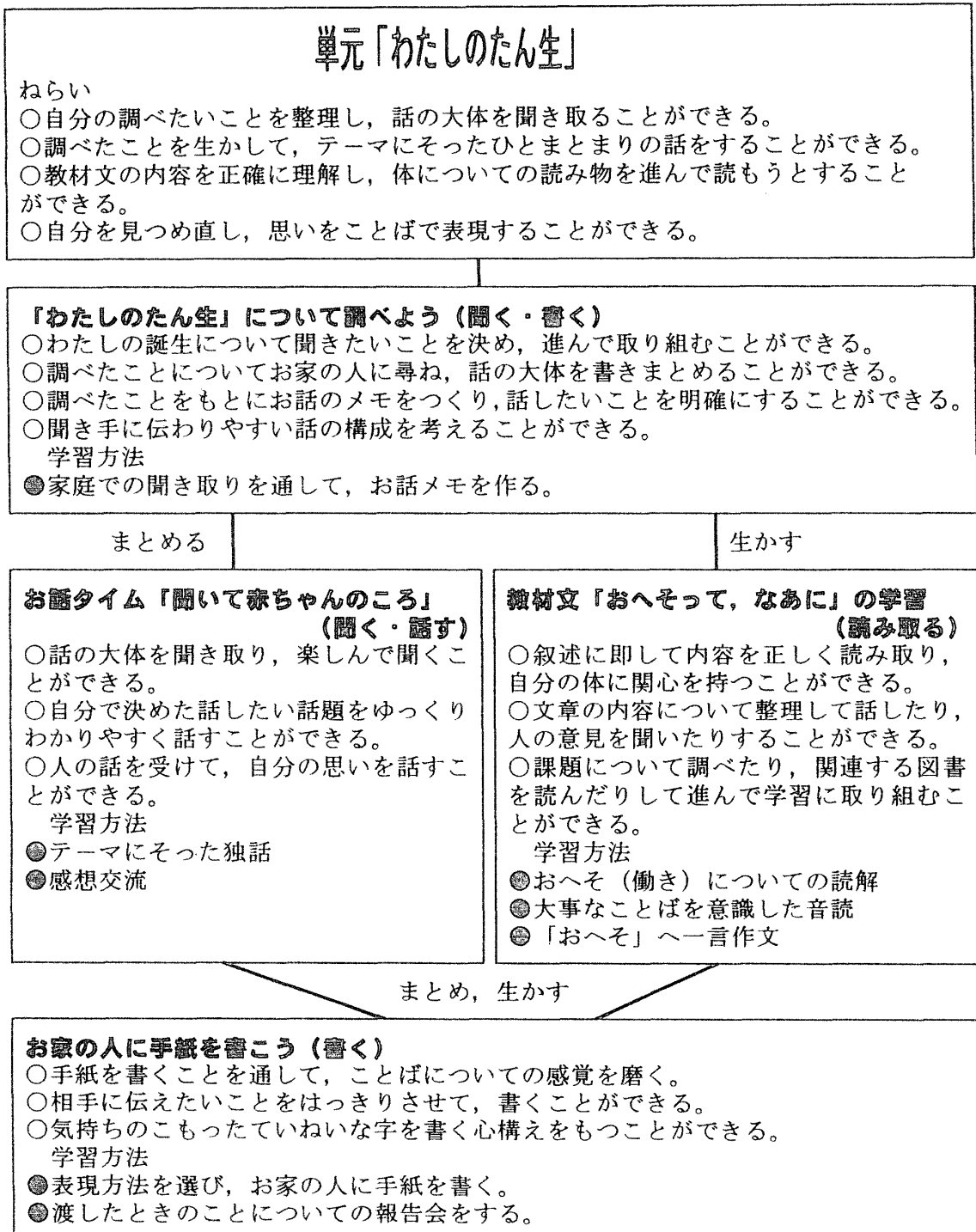
子どもたちの表現活動を豊かなものにしていくためには、場の設定が必然的なものになっているかどうか重要になる。

3 実践例「わたしのたん生」(第2学年の実践から)

(1) 単元について

「自分について知る」ことは、子どもたちにとって最も身近で、興味の抱くことである。自分の誕生について、エピソードや成長の経過、両親の願いなど自分に関わる新しい発見が期待できる。その新しい発見をみんなに話し共感し合う活動と教材文「おへそって、なあに」を読み進める活動を並行して学習を進めることで、自分と照らし合わせながら文章を読み進めることができる。本単元は、国語の学力(聞く力・話す力・読む力・書く力)を実の場の中でつけていくことを通して、自分探究の学習をめざすものである。

(2) 単元全体の活動関連表



② お話タイム「聞いて わたしの赤ちゃんのころ」(聞く・話す活動) …常時活動

「小さいころのわたし」

わたしが生まれたのは5月5日の子どもの日です。でも予定日は5月1日だったそうです。なかなか生まれてこなかったのが、前の日にみんなで山を散歩したそうです。そして次の日、わたしは朝6時33分に生まれました。お母さんは、生まれてほやほやのわたしを抱いたとき、「生まれてきてくれてありがとう」と言ったそうです。わたしは、『何が何だかわからないけどほめてくれてありがとう』と言うつもりで何か言ったかもしれないなと思いました。

お姉ちゃんは、わたしによく歌を歌ってくれたそうです。「ぞうさん」や「雨ふりくまの子」とかよく歌ってくれたそうです。今ごろはポケモンの歌ばかり歌っているお姉ちゃんです。ちょっとびっくりしました。

自分で言うのもおかしいけど、しっかりした赤ちゃんだとお母さんが言ってくれました。わたしにもこんなときがあったんだとはじめて知ってちょっとうれしかったです。

話し手は、前の日にメモを見ながら練習し、自然に話すことを心がけるように指導した。

左の例は、ある女の子の話である。この子は、話した後、自分の赤ちゃんのころの写真を2枚みんなに見せて話を締めくくった。

その後、聞き手の中から二人選び対話活動と全体での感想交流を行った。聞き手の反応は、次のようなものであった。

○自分のこと

- ・わたしも予定日をすぎて生まれた
- ・ぼくのお兄ちゃんは一した

○話し手に対する質問

- ・どこの山か
- ・どんな歌か

○写真を見て思ったこと

- ・かわいい
- ・よく似ている

○題のつけ方

- ・よくわかる
- ・一君と似ている

③ 教材文「おへそって、なあに」の授業から(読み取る活動) …第二次

ア 書かれてある内容を読み取るための課題を作り、解決する

音読練習を何度か繰り返した後、「不思議に思ったこと」をもとに教科書を読んでわかることとそうでないことに分け、教師がまとめて共通課題を作った。教材文を読み進めるにあたっては、「おなかの中の赤ちゃんはどうやって生きているのか」「おへそは何のためにあるのか」「くだのやくわりは何か、もっと知りたい」の3つの課題にまとめられた。読んでもわからない課題の「赤ちゃんは、どうやって生まれるのか」「いらなくなったものとは何か」については、関連する図書を読むところで見つけていくことにした。

「おへそは何のためにあるか」「おなかの中の赤ちゃんはどうやって生きているのか」の2つの課題は、教材文に問題提起文(形式段落①と④)としてあげられているので、子どもたちに「教科書のどこを読めばわかるか」と投げかけた。赤ちゃんはどうやって生きているのかについては、形式段落の⑥の叙述が次々とあげられた。おなかの中の赤ちゃんについて読み取っていくうちに、くだの役割にもふれることとなった。おへそは何のためにあるのかについては、形式段落②の「大切なはたらき」とは何かを考え、「おかあさんとつながっていたあと」と似ている叙述を探すことで文章全体のまとめである形式段落⑨に目を向ける学習展開を図った。音読練習を重視したので、教材文のどこに何が書いてあるのかが理解しやすく、読み取りに生かすことができた。

イ 筆者の論理展開・表現の工夫について考える

共通課題を解決した後、形式段落ごとに大切なキーワードをまとめ、子どもたちに提示した。筆者のやまだまことさんは、「この文章を読むみんなに何が言いたかったのだろう」と問いかけたところ、「おなかの赤ちゃんのこと」と「おへそのこと」と「その両方」の意見にわかれた。話し合ううちに「題がおへそってなあにだから」「赤ちゃんのことはおへそのことをいうために書いた」などの意見が出され、「おへそのこと」に収束していった。話し合いの後、もっと知りたかったこと、良かつ

4 考察

授業仮説について、次の視点から考察していく。

(1) 身近な題材を取り上げたことについて

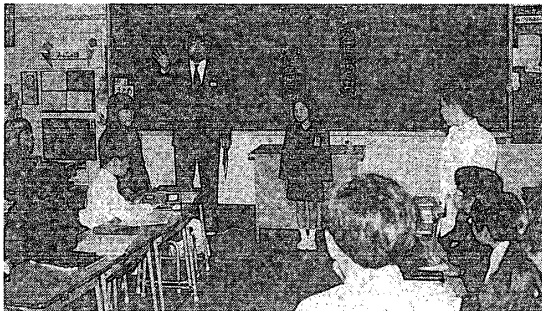
第一次での教師の独話によって、子どもたちは「自分の場合は、どうしてこの名前なのだろう」「赤ちゃんのときにどんなことがあったのだろう」という関心をもった。そして関心が出発点となって「聞いて調べよう」「調べたことを話そう」という学習課題にそって意欲をふくらませ、話す・書く活動（行為）につながっていった。調べようと思ったこと以外にも、聞き取ってきた子どもたちも多く見られた。このことは、学習材に対する子どもたちの働きかけが積極的になったことを意味する。赤ちゃんのころのことについて調べる活動を通して、これまで知っていたことを学習に生かす喜びや新しいことを発見できる喜びを感じることができたと考える。

(2) 学習のモデルを示したことについて

第一次では、教師が独話のモデルを示したことで、具体的に何を聞いたらよいか明らかになった。聞き取りのプリント例を見てもわかるように、聞き取った内容が豊かだったので、子どもたちは話したくなるようなことがらを発見することができた。また、聞き手に新鮮な話題を次々に提供することもできた。第三次では、似顔絵、詩、ことばのおくりものと具体的なモデルの提示を行ったが、そのことが逆に子どもたちの表現活動を収束の方向に向かわせる危険性も生んだ。モデルや具体例を示すことは子どもたちが主体的に学習を進めるにあたり有効であるが、学習目標とずれない範囲で、どう活動が広がっていくのかを考慮する必要がある。

(3) 単元全体の関連について

「たん生」や「赤ちゃん」という関連したテーマのもと、様々な言語活動が行われることは、ものごとを広い視野で捉える意味において大切なことである。お話タイムでは、へそのおを見せたりおなかの中にいたときの話をしたりして、教材文を読む活動に役立つこともあった。また、手紙を書く活動は、それまでの学習が土台となって、書く目的・相手・内容がとらえやすく、発展として有効な手だてであったと考える。



5 おわりに

●マンションの集合ポストの中にほかの手紙といっしょに入っていたので、「どうして？」とびっくりしたよ。「これが作せんだよ」とうれしそうに言うすがたに思わずほほえんでしまったね。その上、手紙を読んで、またまたかんげき！お母さんのなにげないことばやこうどうからいろいろかんじとってくれていたんだね。これからもころしていかないといけないね。(母より)

●おふろをあらいに行ったら、お手紙があったので、とてもびっくりしました。お母さんの絵もとてもじょうずにかけているし、「ありがとう」ということばをおくってもらって、心にじーんとあたたかいものがあふれてきて、うれしくしあわせな気持ちになりました。お母さんから「いつも楽しく、おてつだいをしてくれてありがとう」ということばをおくります。(母より)

この返事を読む子どもたちの顔は、咲顔（えがお）にちがいない。今後も、ことばによる表現活動を通して、自己を切り拓き、他者と共感し合う喜びを味わわせていきたい。